
夢想

桜木朱李

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想

【Nコード】

N2019G

【作者名】

桜木朱李

【あらすじ】

いつもより早起きの朝。白い光と明るい日差しに照らされて、この世界は朝の光に燦々と輝いていた。それが、何を境にしたのかも分からぬまま、そんな平和な“世界”は何処かへ消えてしまった。風の吹かぬ、人の消えた町に私は立っていた。唯一見た生き物は、動かぬ虫と真つ黒な鳥ばかり。町の外に広がっていたのは、漆黒の大地と白亜の空だった。私の“世界”は何処へ？“醒めぬ夢”とは？こうして、“目覚めぬ夢”は静かに形を歪に変えてゆく……。

プロローグ 朝の風景

目が覚めても意識はまだ夢の中である状態が多い。徐々に意識が覚醒し、ようやくと私は目覚める。

体を起こすと先程まで見ていた夢など、まるで頭の中のゴミ箱に捨ててしまったかのようにさっぱりと忘れてしまう。しかし、別段それに対して無関心であったため、私は通常通りの朝を迎えた。しかし今日は不思議と早起きをしたようで、目覚まし時計が鳴っていない。それはそれで奇妙だが、それに対しても無関心なので、やはり通常通りの朝を迎えることにした。

自室を出て冷たい廊下を裸足で歩き、階段を下りるとほのかな甘い香りが私の鼻孔を優しく包んだ。自然と足も軽やかに、私はリビングへと飛び込んで行った。

「母さん、おはよう」

そう声をかけると、母さんは一瞬びつくりしたが、すぐにニコニコと上機嫌な笑顔を向けた。

「おはよう。千秋が早起きなんて珍しいわね」

「余計な御世話だよ。……今日はホットケーキ？」

「鼻がよく利くこと。ええそうよ。あとちよつとだから、一輝起こしてきてくれない？」

私は軽く返事をし、下りてきた階段を駆け上がった。私の隣の部屋は弟の一輝の部屋だ。小学校五年生になる彼は、姉の私に似たのが朝がとても苦手である。そんな一輝を起こすのは本来私ではなく母さんの役目であるが、今日は珍しいことに私。その、少し珍しい一日の始まりに自然とわくわくしていた。

一輝の部屋の扉を、一応礼儀正しくノックし、静かに開いた。朝日が青いカーテンの隙間から差し込み、ベッドの中の一輝の寝顔を優しく照らした。弟の安眠を妨害するのは何かと覚悟のいることだが、私は間髪入れずに毛布をはぎ取った。

「こら、一輝。朝だよ」

「う、ん……？ 姉ちゃん？」

「ほらほら、姉さんよりのんびり寝てるなんて図々しいにも程があるってものよ」

「ええ？ まだ六時じゃん……」

そう言いつつ二度寝に入ろうとしている可愛い弟を、私は持ち前の運動神経と妙な怪力で軽々と持ち上げた。それはつまり、お姫様抱っこという格好である。

「ちよつと！ 下ろせよっ」

「いいじゃない、たまには」

「嫌だ、気持ち悪い！」

本気で拒絶されたことに多少傷つきはしたが、おかげで一輝はすつきりと目覚めれたようだ。

姉弟二人で階段を下り、ダイニングテーブルに準備されたホットケーキを見て、そろって歓喜の声をあげた。

ふわふわとしたホットケーキが黄金色のメイプルシロップを纏い、香ばしい香りをリビングいっぱいに漂わせている。

「今日はなんかあるの？」

いつもと少々違う様子に、一輝が疑わしげに私達を見つめるが、私は否定の意を込めて首を横に振った。

「違っつて。たまたまだよ」

「本当？」と、まだ疑っているようだがそれもすぐに消え、今はホットケーキを美味しく口に頬張っている。その様子を見ると微笑ましいとも思ひ、これはきっと姉馬鹿だなあのんびりと感じた。

「ちよつと早く起きたぐらいでのんびりしないの。たまには早めに学校行きなさいな」

母さんが忙しそうにスーツに着替えてそう声をかける。

我が家には父親はいない。私の父親は私が生まれてすぐに出て行ってしまったし、一輝の父親は一輝が幼稚園に入った頃に、知らない

い女との浮気で母さんと離婚した。要するに、私と一輝は直接的に血のつながりはない。二人共通しているのは、母さんの血と朝寝坊だけだ。幸い、私も一輝も母さんによく似たため姉弟としてもなんら違和感はない。母さんはそんな私達を、女手一つで育ててきた。

実際、仕事をするのが大好きなようで、今では社内でも慕われているキャリアウーマンだ。そんな母さんを、私はひどく尊敬している。「それじゃ、私、着替えてくるね」

ホットケーキを食べ終えて、一輝はテレビを見、私は制服に着替えるために自室にいったん戻った。

私は自然と口角が上がっていることに気がつかなかった。朝から、なんて良い日なんだろう。

今日一日で“私の世界”が変わってしまったことなんて気がつきもせずに。

第1話 振り返れば — NOISE —

賑やかな教室、昼時。試験ももう間近で、クラスメイト達は口々に教師や授業内容に関する愚痴や文句を零していた。担任教師がいないことを良いことに、茶髪の女子たちは携帯電話に集中し、鏡をキラキラと反射させる女子は「マスカラが上手くいかない」と嘆いていた。

そんなクラスメイトから少々距離を置いて、私は弁当箱を広げて黙々と食事をしている。近くの席に座って食事をしている瞳と恵子は、ファッション雑誌をパラパラとめくりながら最新のメイクについて語っていた。

「千秋も、たまには化粧とか、どう？ 元から肌綺麗だし、目も大きいし二重だから、もしかしたら化粧とか、いらなくもしいないけどさ」

「おっしゃる通り、私はそういうのやらないよ」

その言葉に、恵子は少し不愉快そうだった。

「なんで？ 今よりもっと綺麗になれるよ。ほら、ナチュラルメイクとか」

すると瞳も「そうだよ、それが良いって」と私に化粧を勧める。

「もう高校二年生の冬だよ？」と、恵子はよく分からない理由をつけた。私は、少し照れくさくて俯いて答える。

「私、体育会系だし、そういうの似合わないんだよね。自分的に」

私は昔から、そういうヒラヒラとしたスカートとか、キラキラとしたジュエリーなどには全く興味を示さず、動きやすければどんな格好でも良かった。そんな私を二人して「もったいない」というが、どこももったいないくない。これが、“私”だ。

すると、「あ、じゃあさ、」と瞳が話を続ける。

「千秋、好きな人いないの？」

突然の話題転換に私は一瞬、食べていたプロッコリーを危うく喉

に詰まらせるところだった。恨めしげに彼女を見やり、「はあ？」と当然の返答をする。

「だって、千秋のそういう話聞かないもん」

「私も気になる。いないの？」

好きな人なんて、考えたことすらなかった。当然、興味がない。そういうのは作るのではなく、自然とできるものだと悟っていた。

「いない」

そうきっぱりと答え、食べ終わったばかりの弁当を学生鞆にしまい、立ち上がる。

「どこ行くの？」

「前田先生のところ。この間の授業、腹痛で私休んだでしょ？ プリントもらってくる」

気の抜けた「いつてらっしゃーい」という声と共に、二人は再び雑誌に夢中になる。相変わらずだと、私は肩をすくめて思った。

教室を出て、廊下を左に真っ直ぐ歩く。渡り廊下があるのでそこを抜けて、いくつか教室を追い越してから右手に現れる階段を上った。階段を上つてすぐに左に曲がると教員室がある。私は小さく三回ノックをし、「失礼します」と小声で呟いて中に入って行った。手前のデスクにいる、国語教師の前田先生は愛妻弁当を食べている最中であつた。

「お、柏木。お前、腹痛大丈夫か？」

「大丈夫だと思います。熱はありましたけど」

「あんまり無理すんなよ。それと、はい。プリント。ここんどこ来週小テストするから、勉強しとけよ」

プリントを受け取り、私は礼を言った。その時、ふと愛妻弁当の中身が見えたわけだが、思わずニヤツと笑む。ご飯の上にハート形の海苔が何故か大量に敷き詰められていた。私が見ていたことに気が付いたのか、前田先生は照れ笑いを浮かべる。

「ああ、これは……なんていうのか、女ってこういうのが好きなのか？」

先生は結婚二年目ではあるが、奥さんの愛情は未だに尽きないよ
うで、先生自身も嬉しい半分恥ずかしいらしい。私は頷いた。

「先生、愛されてるじゃないですか」

そう茶化すと、先生は「いやあ、そうかなあ」などと顔を赤らめ
て嬉しそうに言うものだから、私も思わず嬉しくなった。

「失礼しました」と教員室を出て、教室に戻ろうとした。

先程通った道をもう一度戻る。すると、渡り廊下の向こう側に
瞳と恵子がいた。化粧室にいたようで、こちらに笑いかける。私も
笑って、歩調を少々速めた。すると、瞳が突然不思議そうな顔をす
る。

「千秋」

「何？」

「後ろ、どうしたの？」

後ろがどうかしたというのだろうか。私はスカートに何か付いて
るのかと思って制服を見下ろす。しかし、「違うつて。後ろ」とい
う瞳と恵子の声に、私は振り返った。

振り返った先は、住宅街。しかも、よく見たことのある風景だ。

一瞬思考が停止し、すぐさま瞳と恵子を見る。否、その場にはいな
かった。

「は……？」

見つめる先は、住宅街の延長線。先程までいたはずの渡り廊下で
は、ない。二人の名前を呼ぶが、それも無意味なことであった。

「うそ、何ここ？」

しかし、明らかに見知った風景。ここは、私の通学路だ。フラフ
ラと一歩二歩歩くが、確実にここは住宅街だ。しかし、私の服装は
二年間着慣れた制服だし、上履きを履いている。ふと思いついて、
スカートのポケットに入っていた携帯電話を取り出す。電源も付い
ているし電池もある。電波だって通常通りだ。私は不安になって、
瞳に電話をかけた。しかし、流れてきたのは聞き慣れたコールでは
なかった。

『無限に広がる荒野が見えても走っちゃいけないよ。そこは落とし穴だからね。例えばナイフを持った犬でも熊でも追いかけてきたら逃げてみな。そうしなくちゃ無限に広がる荒野から逃げることも抜け出すことも落ちることも這い上がることも飛び上がることも駆け抜けることもできないよ……』

背中を覆う奇妙な嫌悪感。延々と意味の分らないことが携帯電話話から流れてくる。その声は、機械のようで女性のようで男性のようで子供のようで老人のようで、叫びにも歌声にも怒号にも泣き声にも笑い声にも聞こえた。声のバックを覆うのは、真夜中のテレビで流れる砂嵐画面のノイズ音のようだ。

気味が悪くなったので、一度電話を切る。通話料金を見て、私はぎよっとした。桁数が半端なく大きい。

「何よこれ」

もう一度、今度は恵子に電話をかけてみる。すると、今度はコールが鳴った。しかし、非常に歪で不規則なコール音。しばらくその奇妙なコールに耐えて待っていると、誰かが出た。

「恵子！」

『……た……』

確かに恵子の声だが、こちらにもノイズのようなざわめきが聞こえる。

「何？ 大きな声で言ってくれなくちゃ、聞こえないんだけど……」

その途端、ノイズが消えて、向こう側で恵子の笑い声が聞こえた。悪寒がした。そして、声高らかに携帯電話から先程の意味の分からないことを叫び始めた。

『立って歩いて向かう場所に天国とか地獄とか存在するなら、あんたはどっちに行くか決めているんでしょう？』

「は？ 訳分かんない。説明してよ、何？」

『例えばどっかに神様が住んでいたとしてあんたは忠実な天使の手のひらに踊らされて雨に打たれて嘆いて苦しんでその神様に助けて下さいとお願いしたところで世界の魔の手から逃れられないのかも』

しれないのよねえ？』

叫んでいる言葉は先程同様、全く意味のない言葉の羅列のようだ。私は諦めて、電話を静かに切る。大音量で流れていた恵子の叫び声はぷつんと途切れる。気味の悪い静けさが襲う。何故、誰も何も気になって出てこないのだろうか。

考えたところで答えが出るはずもなく、私は学校へ向かって歩き出した。今はとにかく、人のいるであろう場所に行きたかったから。校門が見え、上履きのまま入る。げた箱には、私の靴があった。けれど、他の誰の靴も無い。嫌な予感がした。私は即座に教室へ向かう。

廊下を駆け抜けて、階段を上り、再び廊下を駆ける。教室に飛び込むと、私の学生鞆が机に引っ掛かっていたけれど、他には誰もいなかった。その途端、校内のスピーカーから奇妙なノイズ音が聞こえた。そのノイズ音を聞いて、嫌な予感がした。先程の、続きではないか？ 途端、鼓膜が張り裂けるほど大音量で流れた声は、瞳の声であった。

『敵陣はすぐ目の前だ！ さあ、気を緩めるな、わが同志達よ！ 負けてはならぬこの戦いは氷点下の世界の如く厳かに行われるべきなのだ！ 敵陣へ乗り込め！ 電子ピアノなんか蹴散らしてしまえ！ 音楽室に親玉がいるぞ！ さあ、蹴散らせ！ グランドピアノの攻防に一人たりとも負けるな！ ショパンがこちらを見つめている！ 奴は敵国の黒幕か？ モーツァルトを背後に従え、今音楽室を占拠せよ！』

無意味かつ、幼稚なその言葉の羅列が頭の中をこだまし続ける。気分が悪い。しかし、これで瞳のいる場所は分かった。放送室だ。放送室は、この教室の真上である。

きつと瞳と恵子の変な冗談なんだろう。私はそう思い直して教室を飛び出し、階段を駆け上がって放送室へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2019g/>

夢想

2010年11月5日14時07分発行